

ガングロヤンキーは神様の一物を咥えたまま

祭りで燃えたぎる男たちに雄っぱいを吸われつくす





真夜中の田舎道はほとんど車が通らないというのに。

バイクで爆音をたてて走ったところで事故の危険度は低く、まわりに家もなくさほど迷惑でないはずが、学校から何十回目かの停学処分。

おまけに今回は「祭りが人手不足だから手伝いなさい」と命令。そうしなければ退学処分をくだすという。

田舎すぎてバイトできるところは皆無、子供がすくないからカツアゲもたかが知れて、薬を売るなどの危ない商売もしてないとあり、万年金欠。

なけなしの小遣いをくれる親にしろ「せめて高校を卒業してくれ！も

し中退したら勘当だあ！」と宣告しているに「上等だ、ぼけえ！」と啖呵を切れるほど家出資金がない俺らは退学処分は避けたく、渋々祭りに参加。

祭りに参加するのは中学二年以来。

高校生からは褌に裸で法被を着なければならず、現代っ子には抵抗があつたが「おお、焼けた肌に赤い法被が栄えるな！」「さすが元柔道部、褌をすると鍛えあげた肉体に磨きがかかるようだな！」「とおっちゃんどもが手を叩いてやんややんや。

だけでなく、法被から覗くわがままボディを異性が放っておかず、熱視線を送りまくり。

「ふん、祭りもわるくないな」と思いつつ、先公の命令に忠実に従うつもりはなく、頬を赤らめて見つめてくる一人に耳元で囁き、森の暗

がりへ。

祭りの明かりが遠くながら辛うじて届くようなところでアオカン。

「よ、よかったよ、わ、わたし友だち、待っているから、いくね・・・」  
と浴衣を直して去っていった背中を見て、息を切らしながら舌なめずり。

年に一回の祭りに情熱を燃やす野郎どもの血氣盛んぶりに当てられたか、まだまだ精力が有り余って、飢えたように物足りない。

サボれば退学処分とはいえ、先生だって四六時中見張っているわけではなからうし、そも禪野郎どもがこった返しているなかで見つけるのは難しいだろう。

「というわけで、御輿が練り歩く間はたのしませてもらおうかな」と

鼻唄を吹いて女を物色しにいかうとしたとき。  
足になにかがあたり、なにかが地面に散らばった。

感触と音からして石のようで、餓鬼がいたずらで山のように積んだのか。

そう思いつつ、放つて歩いていかうとしたら「待たぬかあ！この不屈きものめええ！」と頭のなかに絶叫が反響。

「よくも、わたしのまえで目が腐るような醜く不浄な行いをしたなあ！

さらには入れ物にまで無礼を働くとはああ！」

脳みそにきんきん声が突き刺さるようで目眩を覚えながら「これが幻聴でなければ」と考える。

暗くて見えないが、ご神体のような石像を蹴って壊したから相手は怒っているのだろうと。

とにかく頭のなかに蚊が飛びかっているような声を静めたく「わかったよ、明るくなったら直すから」と宥めるも「それだけでは許さぬう！」と激昂、鼓膜が内側から突き破られるような響き。

「貴様、祭りを軽視して冒瀆するような無礼千万な行いを尚もしようとしているだろう！」

わたしの偉大なる兄の輝かしい功績を称える祭りに不敬なまねをするなど、許しはせぬぞおお！」

相手が神だろうと、いい加減鬱陶しくて「許さないってえ？どうするわけえ！？」とやけになって噛みつけば「こうだああ！」と急激に尻



の奥にすさまじい圧迫感が。

「つつつつうう！」と声にならない叫びをあげて地面に膝を屈し、息をつめながらおそるおそる尻に手を。

太く固いものがぎちぎちに詰めこまれている感触があるも、禪をずらして触れば、たしかに広げられているが、空洞。

「ど、ということ？」と困惑する俺の頭をさらにかき乱すように「わたしの一物だああ！」とまぬけな響きながら怒声が。

「祭りから遠ざかるほど、躍動するぞお！

ついでに胸にもしかけをしておいたから、せいぜい祭りで血を滾らせておる男どもに気をつけることだなあ！」

「祭りが終わるまで啞えさせておくぞおお！」を最後に叫びは聞こえ

なくなり、神様の透明の一物が律動しだす。

俺は女しか抱いたことがないし、一人エッチでも自分の息子以外は触らない。

初体験にして光栄というべきか、神様の男根をぶちこまれたわけだが、はじめの痛みと不快感はどこへやら、いつの間にか中が女のように潤っているし、摩擦されるたびに「はあう、ああ、あああ、ああうん……！」と禪が張りつめて染みが広がるし。

「糞エロ神が……！」と悪態を吐いて奥歯を噛みしめ、起き上がったなら祭りとは逆方向へ。

中学三年で柔道部を辞めてから投げやり全開の俺だ「神に罰を与えられようが、退学処分されようが、知ったことか！」と前屈みになりながら歩いていく。

が、神様がいったとおり、一歩一歩すすむたびに一物の暴れ具合が増す。

一旦、ぬいては突きあげるという過激さにたまらず「んひい！」と射精してしまい、倒れそうになったところ木にしがみついた。

すこし休んでから、また歩きはじめようと思ったのだが、絶え間なく奥を先っぽで突かれまくって「んんお！おふうう！んおおう！」と精液が噴きっぱなし。

強制過剰快感供給が辛すぎるし、腫れたように膨れあがる息子と胸の突起が、むずむずしてしかたないし。

「ああ、ああ！乳首とちんこめっちゃ触りたい・・・！」と焦がれるも、これも神様の仕業なのか、手がびくともせず。

禪の先っぽが木に触れそうで触れず、もどかしすぎて死にそうになつていたところ「マサル？」と藪を掻きわける音と声が。